# 「恩送り」のバトン

幸松 英恵

大学の専攻は国文学だった。四年間好きな文学の勉強をして皆と同じように就職活動をし、社会に出ていくのだろうと漠然と考えていた大学一年の冬、就職に有利になれば程度の思いで参加した英語研修が大きな転機になった。各国から集まった学生と机を並べて学んだが、特に親しくなれたのは中国や韓国の学生たちで、色々な意味で彼らは日本への関心が高かった。対して自分は隣国の歴史、文化、また言語についていかに無関心であったかを思い知り、帰国後に中国語と韓国語の勉強を始めたのだった。

当時（九〇年代の終わり頃）、中国語は大人気で母校には初級だけで二〇クラスあり、さらに抽選が行われていた。人気に対して講師数が足りていなかったのだろう、去年まで中国で弁護士をしていたという方が先生だった。ビデオを見たり歌を歌ったり楽しい授業ではあったが、言語現象に対するすっきりした説明が得られないこともあった（ということを言い訳に、中国語は中級で挫折した）。

韓国語の方は、日韓W杯が二〇〇二年、ヨン様ブームが二〇〇三年、韓流ブームの前夜であった。韓国語クラスがある大学は稀で、母校では初級一クラスがかろうじて開講されていた。こちらの先生は、韓国語が言語的にどのような特徴を持っているかについての説明が丁寧で、運用能力を伸ばすトレーニングより先生の解説自体が面白かった。発音、文法についての先生の解説は、今思えば、私が初めて触れた音韻論であり、文法論であり、対照言語学だった。その先生は、東京外国語大学教授（当時）の野間秀樹先生で、週に一度、他大学の語学講座を担当されていたおかげで、私は何も知らずに言語学の研究者から初級を教えていただく機会に恵まれていたのだった。





言語そのものに興味を抱いた私は、現地で学ぼうと翌年の冬、二ヶ月の語学研修に参加を決め、厳寒の金浦（キンポ）空港に降り立った。本学の協定校である韓国外国語大学の語学堂で会ったクラスメートは韓国人の夫を持つ奥さんたち、韓国外大の外国語教員、そして、税金対策のために来た（今でもその理屈は謎）という青森の漁師のおじさんだった。ドラマやK－POPが好きで学んでいるという学生は皆無の時代であった。

担任は、崔（チェ）先生という威勢のいい女性で、何故か学生全員をオンニ、オッパと呼んだ。年下の私を「オンニ（お姉さん）」と呼ぶのも、学生の一人に過ぎない青森のおじさんを「オッパ（お兄さん）」と呼ぶのも普通ではない。しかし下は一〇代から上は六〇代までのクラスの中で、先生が一様に（愛嬌を込めて）学生を「姉さん兄さん」と呼ぶのは、先生のキャラクターも相まって奇妙な団結感を生んでいた。すぐに日本語を話し始める青森の漁師さんに「オッパ！　アンデヨ（ダメですよ）」と注意しても角が立たず、クスッと笑って流せる雰囲気づくりに役立っていた。みんな崔先生が好きで、今思えば彼女からは「明るい雰囲気づくり」や「クラスコントロール」を学んでいたのではないかと思う。

その後、言語学を本格的に学ぼうと本学の大学院に進学し、先生方の薫陶を受け、最終的には研究者の道を歩むことになった。学部時代国文学を学んでいた自分が日本語研究者の端くれとして本学に席を得て、日本語教育にも携わっていることを時々とても不思議に思う。ここに至る道程において、言語学の面白さ、外国語学習の楽しさを教えてくれた先生方の存在が大きかったことは言うまでもない。それは翻って、今の自分の振る舞いが学生に影響を与える可能性があるということである。肝銘の上で、受けた恩を次代に送る「恩送り」ができるよう、日々の研究に、授業に励むのみである。

**ゆきまつ・はなえ**　大学院国際日本学研究院准教授。専門は日本語学。著書に『初中級からはじめる日本語プロジェクト・ワーク』（共著、くろしお出版、二〇二三年）などがあり、論文に「事情を表わさないノダはどこから来たのか――近世後期資料に見るノダ系表現の様相」『東京外国語大学国際日本学研究』プレ創刊号（二〇二〇年）などがある。